



静岡大学名誉教授  
小和田 哲男  
おわだ てつお



「本をたくさん読んでいたから天下が取れた」などというといふすが、信長や秀吉が本を読み、歴史を学んでいれば、もう少しちがった展開になったかもしれない。  
家康の本好きは、家康の侍医であり側近でもあった板坂下斎の証言がある。下斎の著した『慶長記』によると、『延喜式』や『吾妻鏡』といった和本だけでなく、『論語』『中庸』『史記』『漢書』

## 「徳川家康が作った図書館」

いわゆる「天下取りの三英傑」といわれる織田信長・豊臣秀吉・徳川家康の三人の中で、一番多く本を読んだのは文句なく家康である。「本をたくさん読んでいたから天下が取れた」などというといふすが、信長や秀吉が本を読み、歴史を学んでいれば、もう少しちがった展開になったかもしれない。  
家康の本好きは、家康の侍医であり側近でもあった板坂下斎の証言がある。下斎の著した『慶長記』によると、『延喜式』や『吾妻鏡』といった和本だけでなく、『論語』『中庸』『史記』『漢書』

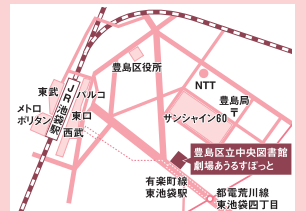
# と しょ かん つう しん 図書館通信



### トピックス

- 巻頭言 静岡大学名誉教授 小和田哲男……………1ページ
- 図書館と私 千早図書館運営専門員 橋本奈央子……………2ページ
- ザ・レファレンス 郷土資料館学芸員 秋山伸一……………2ページ
- 生涯の一冊 2011年度図書館経営協議会委員 根岸博之……………2ページ
- 二人の明治ルネサンス人 豊島区図書館専門研究員 水谷千尋……………3ページ
- 『赤い鳥』の録音図書完成……………3ページ
- 読み聞かせボランティア募集……………4ページ
- 図書館イベント情報・図書館カレンダー……………4ページ

発行 ●豊島区立中央図書館  
東京都豊島区東池袋四一五一一  
ライズアリーナビル四階・五階 TEL 七〇八四四一  
電話 ●〇三―三九八三―七七八―  
FAX ●〇三―三九八三―九九〇四  
ホームページ ●http://www.library.toshima.tokyo.jp  
発行日 ●平成24年4月



## 新航路 [22]

## 図書館の運営体制

平成24年度がスタートしました。新入生、新社会人の皆さんにとっては、人生節目のスタートです。おめでとうございます。  
図書館も新年度を迎え、気持ちを新たにスタートしました。今回は図書館の運営体制についてお知らせしたいと思います。今から15年前の平成10年度までは区の常勤職員がすべての図書館を運営していました。が、現在は区の常勤職員、非常勤職員と民間事業者で運営しています。区の常勤職員に限ってみれば平成10年度に100名いた職員が、平成23年度には26名と約1/4になりました。一方、図書館のサービスに直接従事している非常勤職員には3つの職種があり、64名が在籍しています。そして、常勤職員だけの時代には司書資格を持

つ者はごくわずかでしたが、非常勤職員は全員が司書資格を有しており水準の高いサービスの提供に寄与しています。その非常勤職員の一つ目の職種は、平成11年度から採用が始まった図書館奉仕員で、主な業務はレファレンス（読書相談）業務や選書、区立学校との連携業務などです。二つ目は平成21年度から始まった図書館運営専門員です。こちらは館の庶務事務や連絡調整を主としますが、レファレンス業務などサービス業務にもあたっています。最後に、点字図書館で視覚障害者のために点字図書館業務を担当している点字指導員がいます。  
このように時代の流れとともに図書館の運営体制も変わってきていますが、新年度にあたり、来館者の皆さまに喜ばれる図書館を目指して、より一層サービス向上に努めてまいります。

## Current & Encounter

### 『続・西田幾多郎という人』 豊島区図書館行政政策顧問 粕谷 一希

西田幾多郎ほど悪口を叩かれた人はいない。なぜそうだったのか。戦争中に西田哲学がもてはやされたからだろう。それは横暴な陸軍を押えるために、海軍が京都学派と組んだためだろう。  
自由主義的な人々が排斥されたあと、近衛文麿と西田学派は軍部に対して最後の砦となった感があったらしい。文芸春秋社の池島信平さんは、電車の車内吊りを見て「リハールルに感じられてうらやましく思った」と回顧している。それが戦後は戦争協力の名の下に断罪された。  
今日では上田閑照氏の書かれた伝記がもつとも客観的で、西田幾多郎への敬意も伝わってくる。上田さんは昭和二十年東京から京大へ入った世代で、戦時下の最後の一人である。西谷啓治の弟子であった。西谷さんから貰ったドイツのレクラム文庫を売り払って食事に代えてしまったという。西田さんは昭和二十年六月に亡くなっているから直接の話は聞いていないかもしれない。  
唐木順三氏の回想によると、西田さんの講義には学生だけでなく、同窓会の人々、また助教の和辻さんたちまでが聴講していたという。西田幾多郎の話は一種の雄弁だったのではないかとと思う。なぜそれほど有名になったかといえば、西田さんは京大哲学科の創設者であり、その一人、一人との対話と忠告が行き届いていた。波多野精一、田辺元、和辻哲郎、九鬼周造、みな西田さんが京大に引った人々である。その人々が皆最期まで西田さんを尊敬していた。こうした現象は東大ではみられない。規模が京大は小さかったせいもあるが、西田さんだけでなく、原勝郎も、新村出も、狩野君山も皆そうした傾向があった。これらが学派を形成してうらやましい人間関係である。  
この濃密な関係を田舎者と見るかどうかは立場によってちがうだろう。21世紀の日本の大学も、こうした学問共同体を再構築してよいと思う。政治団体と結びあがりか能ではない。

なって、二年後、駿府城に移ったが、駿府城の中に「駿河文庫」という図書館を作っていたのである。蔵書数は千部、一万冊におよんでいたという。中には『周易』や『齊民要術』といった中国の典籍にまじり、『古事記』『日本書紀』のほか、『源平盛衰記』といったおなじみの本も含まれていた。  
本の蒐集にも熱心で、おもしろいエピソードが伝わっている。直江兼統が珍しい本をもっているのを知った家康は、兼統に貸与を願い出、書写させていたというのである。兼統といえば、あの有名な「直江状」で家康を怒らせた武将で、関ヶ原の戦いときの敵対者であった。家康の本好きを如実に物語っているエピソードといつてよい。

静岡大学名誉教授。専門は日本中世史(戦国時代史)。NHK大河ドラマ「江」姫たちの戦国」などの時代考証や、近著「黒田如水(三浦)の書房、2012年」など多数の著書がある。

生涯の一冊  
(23)

『東京の空間人類学』  
陣内秀信著  
発行：筑摩書房  
※文庫版は、ちくま学芸文庫



2011年度図書館経営協議会委員  
根岸 博之

法政大学建築学科教育技術員。江東・墨田にて水の都市に関する研究。府中・国分寺にて郊外地域資産に関する研究などのほか、子どもの建築ワークショップも数多く実施。

## 「都市を読むこと」の面白さ

東京の都市のことを知りたければ、この本をまず手に取ることを薦めたい。出版されてからすでに25年以上の歳月が過ぎているが、色褪せることもなく、より輝きをまかせている。自分が生まれた年に出版された本という運命めいたつながりも、この本を特別な一冊にしているのかもしれない。

『東京の空間人類学』は、著者が、地図を片手に実際にまちを歩き、都市の中に隠された歴史を発見し、都市・東京の特徴を解き明かしたものである。江戸時代の古地図を持って東京のまちを歩いてみると、驚くほど現在の東京

の中に、江戸の都市の遺伝子が生き続けているのを見ることができる。私たちは、世界の数々の都市と比較したときに、東京を歴史が残る都市として捉えてしまいがちである。しかし、ちよとまちの見かたを変えてみるだけで、目の前に広がっている何でもない灰色の風景が、急に極上の風景に見えるのだ。それはまるで、謎めいた暗号を解き明かす探偵のように、時空のパスルを解き明かしていく作業である。

東京を見ていくために筆者が注目したのが、「地形」と「水」である。江戸の都市は、まさに自然環境を最大限活

かしてつくられた都市である。主要な道は武蔵野台地がくり出す尾根や谷筋を通り、丘の上には大名屋敷が、低地部分や埋立地には町人地がつけられた。いわゆる山の手と下町だ。こうした「地形」をうまく利用する一方、江戸は「水」の都市であった。いまでは想像つかないほどの河川や掘割が都市内をめぐり、「水」を通じて物資や人が行き交い、さまざまな文化が生まれた。いま私たちは、古い地図を片手に、一歩まちに出てみれば、東京の都市が受け継いできた時代の深みをその足から感じることができる。地域の個性とは何か、と呼ばれる時代において、そこに解答へのヒントがあるはずである。確かに歴史は、現在いるその足元に、目の前の風景の中に、存在している。

## 図書館と私 ⑩

千早図書館運営専門員  
橋本 奈央子

## あかちゃんおはなし会

私が常に思うことは、経験したことや習得したことを着実にひとつずつ積み上げ成果に繋げていくことである。図書館では日常業務に加えて、来館者への対応や、子どもたちの館内行事、館外への出張サービス、内部・外部研修とやらなければならないことが次々と迫ってくる。

そのような中で、怠ってはならない大事なことが、ひとつひとつの事柄を確実にこなさない、得られた情報を身につけてそれを実践で活かしていくことである。それを繰り返しひとつずつ積み上げれば成果となってあらわれ、やりがいに繋がりが次の原動力になると思っ

ている。実際その成果があらわれてきているものがある。それは、あかちゃんおはなし会の参加人数の増加である。昨年比ではおはなし会参加者の人数が2倍になっている。私たちは図書館に足を運んでいただいた親子に、どんな工夫をしたら喜びや本への親しみを感

もらえるか。そして、どうしたら次も参加したいと思ってもらえるか。準備段階から担当者で意見交換を繰り返し、新たな試みを実践しながらよりよい反応が得られる理想のかたちを目指してきた。まず、1回のおはなし会で終わるのではなく、2~3週に渡り同じ手あそび、わらべ歌を実演し覚えてもらう工夫をした。さらに、おはなし会の部屋の設営、雰囲気づくりを工夫し、千早図書館のキャラクターを頻りに起用し実演で使用してきた。これらの結果、徐々に参加者が増え、おはなし会終了後に、「楽しかった」「ありがとう」と声をかけてくださることが増えた。

これはひとりの力によるものではない。各個人が得た情報を共有し、刺激しあいながら担当者一丸となって、チームで取り組んできたことがこのうれしい結果に繋がったのだと思う。一人ひとりが積み上げてきたことを、全体で連結させたこの成果を、今後も持続させて図書館の活性化を図っていきたい。

## ザ・レファレンス

—豊島区の歴史・文化がわかる本⑨—

ご案内：秋山 伸一(あぎやましんいち) 郷土資料館 学芸員



## 巣鴨の賑わいのことを調べているのですが…

豊島区を代表する集客地と言えばやはり池袋。地名の由来や池袋駅の成り立ちなどについての問い合わせは、毎日のように寄せられます。そうした中、巣鴨の賑わいに関する問い合わせも意外に目立ちます。“おばあちゃん原宿”として知られる巣鴨地蔵通り商店街にまつわるものが多くを占め、大学生・大学院生が自身の研究テーマとして扱う場合も見られます。

昨今注目を浴びている巣鴨という地域は、江戸時代には五街道のひとつである中山道沿いに開けた町でした。江戸時代の後半には、巣鴨の植木屋たちによる菊づくりが人気となり、多くの菊見客でこの界隈がごった返す時期も見られました。つまり、巣鴨の地が“おばあちゃん原宿”と呼ばれるようになる150年以上前の段階で、〈賑わい〉や〈集客〉の素地はすでに形成されつつあったと言えるでしょう。江戸時代の巣鴨の賑わいについては、『豊島区史 通史編1』、『A・L・A・SUGAMO(あ・ら・すがも)』(郷土資料館企画展図録)の記述を参照して下さい。

さて、以下に紹介する本は、比較的新しい時代の巣鴨の〈賑わい〉や〈集客〉について書かれたものです。

『おばあちゃん原宿 巣鴨とげぬき地蔵の考現学』(川添登編著、平凡社、1989年)は、とげぬき地蔵(高岩寺)に人々が集まる理由やその傾向について、今から二十数年前のデータな

がら、歴史、ファッション、行動追跡などの面から分析しているユニークな一冊です。『とげぬき地蔵商店街の経済学』(竹内宏著、日本経済新聞社、2005年)は、地蔵通り商店街になぜシニア世代が多く集まるのか? という素朴な疑問について、様々な切り口から分析したものです。また、『座談会集 巣鴨のむかし 第1~4集』(巣鴨のむかし編集委員編、巣鴨のむかしを語り合う会、1989~2000年)は、地元で長年居住されてきた方々(巣鴨のむかしを語り合う会)により何年にもわたって行ってきた座談会の様子をまとめたものです。巣鴨・大塚の地で明治・大正・昭和・平成を生き抜いてこられた皆さんによる貴重な証言集になっています。

なお、今日という「巣鴨」の範囲は、多くの場合JR巣鴨駅を中心とする比較的狭い地域を指しますが、江戸時代から明治時代前半期の「巣鴨村」は、現在の豊島区巣鴨1-5丁目、西巣鴨1-4丁目、北大塚1-3丁目、南大塚1-3丁目、東池袋2-5丁目、上池袋1-4丁目(一部)などを含む広大な面積を有していました。現在のサンシャインシティ付近(東池袋3丁目)には、かつて巣鴨刑務所(時期によって巣鴨監獄・東京拘置所・巣鴨プリズンとも)があったことも、上記の説明でご理解いただけるかと思います。

※雑誌「巣鴨百選」のバックナンバー(第1号~第205号)も参考してください。



## 二人の「明治ルネッサンス人」 田口卯吉と根津嘉一郎 (初代)



明治4年に完成した六郷橋梁。翌年より新橋・横浜間の汽車が通った。  
(写真協力:大田区立郷土博物館)

豊島区図書館専門研究員 水谷 千尋

1937年生。東大農業経済学科卒。尚学研教養図書出版室長、秀潤社社長、豊島区中央図書館有識者懇談会委員を経て現職。

### 根津嘉一郎(初代)は、明治38年に東武鉄道経

営を引き受け、利根川以北の館林・太田・足利・桐生・伊勢崎など生糸機業地帯に路線を伸ばしていく。しかし、埼玉・群馬県境の利根川に延長591Mの鉄橋を架けるためには大きな問題があった。それは莫大な資金の調達と早期竣工であったが、明治39年4月に着工、洪水でリールを流されたが、1年4ヶ月後の明治40年8月に竣工した。この工事も小川勝五郎の貢献があり『東武鉄道百年史』で『鉄橋の小川』『架橋の名人』といわれた。」と彼を顕彰している。

この橋梁の完成により、「当時わが国の代表的な輸出品であった絹織物を産する両毛地帯と東京を最短のルートで結び、近代国家の興隆を図ろうとする先人の高い志」(同書序文より)が漸く実現することになった。

田口卯吉の名著『日本開化小史』(明治15年刊)では、神代から江戸末期まで、日本の歴史の発展開化には、宗教思想・教育・文芸から生活文化面各々の分野で発展があり、開化には財貨の発展という経済的側面を考察しなくてはならない。財貨の蓄積には、農業技術の改良、養蚕・絹織物の職人技術や、小川たちの建築土木の高度な職人芸によつて生まれると解釈できる。



開通後間もない東武鉄道伊勢崎線利根川橋梁  
<岩田武氏所蔵>(協力:東武博物館)

田口はなお同書で「社会の進歩するや職業の種類日々に相分れ凡百の貨物を製生し、人間の需要を満たさんとす、其職の分れ貨物の出る以て文運の進むを表すべし」と論じる。

### 生糸輸出のワザを分かちあつて

両毛生糸絹織物の「貨物を出る」鉄道ルートを開いたのが両毛鉄道、ついで東武鉄道になった。これに伴う「職業日々に相分れ」の分業があり、生糸輸出に重要な役割を果たした上州人二人がいた。

一人は、富岡製糸場近く、吉井町生まれの堀越角次郎で、暮末江戸日本橋で西上州織物問屋を開く。ある機会から福沢諭吉の知遇を得、経済知識や商売の鋭さから諭吉の財政運営を任された。

横浜に支店を出す時に、生糸織物輸出が日本に不利な外国為替レートで行われるケースが多く、福沢の近代的外国為替銀行設立論の実現を痛感した。角次郎は有力者に出資を説得したが、躊躇すること甚だしく、自ら大株主になり、頭取には要人が就任、自身は裏方にまわった。明治13年(1880)開業したのが横浜正金銀行である。近代史で外国為替貿易決済に果たした役割は言をまたない。

もう一人は、暮末桐生北部、水沼生まれの新井領一郎で、横浜開港場で外国商人に買われる不利な輸出条件に屈せず、自ら渡米し、直接生糸を販売しようとして決意した。出発に際し、群馬県令堀越素彦夫妻に挨拶に行った。夫人が座を外し、紫の錦を奉持して膝をつき、「これは兄吉田松陰の形見の短刀です。兄の魂が籠められているのです。その魂は兄の夢であった太平洋を越えることによつてのみ、安らかに眠ることができるのです。」と、領一郎は謹んで拝受し、信頼に値する人間になることを誓った。渡米中終始短刀を帯同、ニューヨークで新井商会を興し、生糸直接輸出販売を大いに広げ、在米日本人をまとめ、日本人クラブを結成した。孫娘ハル・松方・ライシャワーが著書『絹と武士』で祖父領一郎を語る。堀越角次郎、小川勝五郎共々「生糸をめぐる明治ルネッサンス人」である。角次郎、勝五郎の言葉は残っていない。三人は互いにその存在は知らなかつた。

(つづく)

## 「ひかり文庫朗読会」が『赤い鳥』(全196冊)の録音図書を完成させました!

中央図書館に併設している点字図書館「ひかり文庫」で活動しているボランティアグループの一つに「ひかり文庫朗読会」があります。普段の主な活動は、視覚障害の方に貸し出す録音図書の朗読(音訳)をしたり、希望する方に図書などを直接読む対面朗読を行っています。

その「ひかり文庫朗読会」が、約20年に渡り製作に取組んできた『赤い鳥』大正7年7月号から昭和11年10月発行鈴木三重吉追悼号まで全196冊の録音図書が、この度全て完成致しました。

『赤い鳥』は鈴木三重吉が、豊島区目白で創刊した童話と童謡の児童雑誌です。しかし児童雑誌とはいえ内容はかなり高度であり、旧仮名遣いや複雑な旧漢字がたくさん使われています。また当時は印刷技術が未熟だったためか、誤字、脱字、誤植が所々にあり、どの様に読んだらよいかボランティアの方々も大変苦労したようです。その反面、読んでいく事の楽しさや充実感も感じられたようで「日本語の美しさと話し言葉に伝える力を感じ、読み終えた充実感は大きかった。」「旧仮名で書かれた文章を読んでみると、今よりゆったりした時間の流れを感じ、日本の原風景が見えるようで楽しかった。」等の感想も聞かれました。

この機会に是非、多くの視覚障害の方に「ひかり文庫朗読会」が製作に携わっている録音図書をお聞きいただけたらと思います。



